

田中 昨今、「発達障がい」という言葉が随分注目されるようになって、その意味するところをこまごま説明されたりすると「うちの子もそうかもしれない」と、逆にそれに当てはめて子どもを見てしまう親は少なくありません。でも、「発達障がい」というのは、ほかの子に比べて「ちょっと時間を掛けてあげなくちゃならない子育て」だと思っんですね。時には周りの人の力を借りて、子育てにじっくり取り組む。すると「こんなこともできるようになった!」と意外と喜びも大きい。親にとつて一番の望みは、子どもに発達障がいがあるかないかではなく、子どもと楽しく向き合うことなんです。ですから、子育てのしにくさの原因究明はあくまでスタートであり、決してゴールではありません。「うちの子は、うち

の子でいい」とおおらかに構えられたときが、ゴールなんです。

「障がい」という言葉

— こうなると「障がい」という言葉がなければとも思えてきます。

田中 確かに「障がい」という言葉が足かせになることは多々あります。だからといって、「障がいなんかじゃない」とも言い切れない辛さが日常生活の中にあるのも事実です。勉強しても漢字が書けない子どもを、何の手だて

「お互いさま」と支え合うことの大切さ

子育てはほどほどに

— 子育てでも「時には周りの人の力を借りて」とのことでしたが、もう少し詳しくお聞かせください。

田中 実は、ある町の病院に勤めていたころ、統計を取ってみたところその町の住人の方が一番来ていなかったということがありました。「発達障がい」というと特に異質な感じがするの、周囲の目を気にして、わざわざ隣町まで足を運ぶんですね。でも、これは考えてみると非常に残念なことなんです。子育ては日常的なことですから、本当はすぐ近くに愚痴がこぼせて、じっくり話を聞いてもらえる場所を持っていたほうがいいに決まっているんですから。

— お父さんは仕事が忙しくて、お母

もなく、ただ教室のお客さんにしていいわけがありません。それをどうやって学ばせたらいいか、皆で考えなければいけない。でも、じっとしていない子どもの原因を親だけが理解していて、それを知らない第三者が怒鳴ったり、しかったりしていると、子どもはだんだん学校に行きたくなくなりそうです。そう考えると、皆が理解して、適切に支援するためには、やはり名称は必要だと思います。

さん一人が負担や悩みを抱え込んでしまふケースが多いようです。そんなとき

に家庭以外にも相談できる場所があるのは、強みですよ。

田中 私が一番言いたいのは、親としての自負というか自信は、誰に何と言われようと持ち続けてほしいということ。親は、何だかんだ言っても子どものことを最も身近に見ています。仮にたたいても怒っても、それは子どものことを気に掛けて、心配して、少しでも良い方向に育つてほしいという純粋な親の願いからきていること。だから、そこは親としての自信を持ったほうがいい。その上でもう一つ言いたいのは、子育てはほどほどに、力を抜いていい、ということです。

— 力を抜いていいとは？

田中 例えば学校に対する考え方です。学校は、子どもにとって45%はサロンであり、子ども同士が遊ぶ場です。そこで子どもなりに情報交換して、社会的な力関係とかいろんなことを学びます。そして残り45%は、親が子を託すところだと思います。ずっと子どもと一緒だと、親だつて疲れますから、学校は子育てを委託するところなんだと割り切る。

— とすると、残り10%は…。

田中 勉強するところです。こう考えれば、親も子も気が楽ですよ。子育ては、こうやって分散してやれるものであつて、ずっと一緒にいればいい親だとは私は考えていません。

家庭が、地域が共通認識を持つ

— 確かに、親が完璧を目指せば、子どもにも無理強いすることが多くなりそうです。

田中 イギリスの有名な児童精神科の先生は、ずっとラジオを通して親特に母親にメッセージを送り続けていました。それは「お母さんはほどほどの子育てでいいです」というもので、完璧を目指さないこと、適当に力を抜いて、ほどほどに付き合っていくのが一番いいというんですね。そして、困ったときには誰かに力を借りて「お互いさまだよ」というところで、子育ては考えるべきだというんです。仮に一人で完璧を目指しても、とうて

い完璧に出来ないですよ。ただ悪循環になるだけで、そうなると子どものちよつとしたしぐさにもピリピリしてくるし、自分も情けない気持ちになつてきますから。どこかで打開しなければと思ったときには、人の力を借りる。これはとても重要なことです。

—そして、時には子育てから離れて、一人の時間をつくるくらいのゆとりを持つことも大切だ、と。

田中 そうです。それこそ、誰かに子どもを預けているときくらいは、子育てとは、子どもを見つめ、理解し、その個性を伸ばすことだと、田中先生は終始強調されました。そして、そのためにも「発達障がい」を抱える子どもたちには、特別な支援が必要であるとも訴えられました。

4月からは「特別支援制度」が始動します。同制度では、「教育体制に子どもを合わせる」従来の方針から、「子どものニーズに教育体制を合わせる」方向へと転換が図られ、特に発達障がいの児童に対しては、学校全体での指導や、サポート体制が整えられていく方向です。

石狩市においても、新制度のスタートを受けて、これまで以上に教育機関のみならず、福祉、医療機関等の連携を図り、より充実した体制づくりを進めていきます。

「子育ては大変、でも楽しい!」と、親たちが素直に思えるまちづくりを目指して。市民の皆さんとともに石狩市ではこれからも積極的に子育て事業に取り組んでいきます。

きな喫茶店でコーヒーを飲むとか、幼稚園に行っている間は、家で好きなテレビを見るとか、自分の時間を使って休息を取らなければ。

—しかし、それには家族の理解、そして地域の理解が必要ですね。

田中 はい。まずは夫、そして同居されているおじいちゃん、おばあちゃんの理解がないと、かなりしんどいです。理解プラス手助け。そうやって子どもは育てるものなんだと皆が共通の意識を持つことがとても大切だと思います。

シリーズ最終回を迎えて

平成18年6月号から「いしかりの子どもたち」をめぐる環境をさまざま

な角度から眺めてきた本シリーズは、子どもたちと真剣に向き合う大人たちを追いかけてきた軌跡でもあります。取材を通して最も印象的だったのは、その誰もが特別なことをしているという意識がなく、子どもとのかかわりを喜び、そして楽しんでいたことでした。

「子育ては大変、でも楽しい!」と、親たちが素直に思えるまちづくりを目指して。市民の皆さんとともに石狩市ではこれからも積極的に子育て事業に取り組んでいきます。

一人で悩む前にご相談ください! こども発達支援センター

場所 りんくる2階
問合せ ☎72-7015

子どもの発達について、心配や不安のある方を対象に、専門スタッフが育児についての相談に応じます。どんなことでも構いません! 気になることがあればぜひ、気軽に足を運んでください。

相談例

- ・お友達とうまく遊べない
- ・健診で遅れていると言われたけど...
- ・ほかの子に比べて言葉が遅いかも
- ・行動で気になる
(多動で落ち着きがない) など



私たちが応援します!

「初めは緊張していたお子さんも、センターに慣れるに従い、どんどん表情が変わっていきます。でも、実はそれ以上に変わるのがお母さんたち! 私たちはそれが何よりうれしいんです」



対象 0歳～小学校低学年のお子さん

内容 ①集団指導

- ・親子や大人と一緒に遊びなどで全体発達を促す
- ・友達とかかわりの持てる遊びから、自発性や社会性を育てる

②個別指導

- ・個々の発達段階に合わせた指導

スタッフ

センター長(兼務)、サービス責任者、保育士、言語聴覚士、指導員、臨床発達心理士、理学療法士、嘱託医師(小児精神科、小児科)